

WOMEN'S

NEWS

2004 MARCH

VOL. 43

SPORTS

FOUNDATION



第9回世界陸上選手権・女子棒高跳び
(フォート・キシモト)

JAPAN

Message	女性スポーツ「第3の道」三ッ谷洋子	2
インタビュー	「NFLの経験を新潟のスポーツ振興に」チアリーダー 石田季子さん	3
Opinion	日本女子柔道の変遷 競技スポーツの観点からの一見解 橋本敏明	6
Women's Sports	女子のスポーツ参加—最新の全国調査結果から 工藤保子	8
Column	Lリーグを目指す「美人」サッカーチーム(下) 本田美登里	9
Chat	アムステルダム五輪 女子800メートル激走後の真実は	9
会員の広場	野々宮徹 永田千恵	10
事務局便り		11

女性スポーツ 「第3の道」

この夏のアテネ五輪は、日本の女性スポーツの歴史にとって、非常に大きな意味を持つ大会となりました。日本選手団の女子選手数が、ついに男子を上回るからです。

メダルの獲得数では、すでに前回のシドニー五輪で女子13個に対し、男子5個。レベルではすでに男子を追い越しています。そして今回の五輪ではソフトボール、サッカー、バスケットボール、ホッケー、バレーボールと、チームスポーツの出場が男子より多く、選手数という「量」の面でも逆転しました。

このようにトップレベルの活躍に目を奪われる昨今ですが、女性とスポーツのかかわりも大きく変わってきています。今回は、WSFジャパン会員の活動の中から、そんな動きをいくつかご紹介しましょう。

メッセージを発信する

昨年9月、島谷順子さんが会長を務める日本女子柔道倶楽部は、「女性のための世界女子柔道シンポジウム」を開催しました。メインのプログラムはパネルディスカッション「女子柔道選手引退後の活動について」。

ニュージーランド、マルタ、米国、英国、スペイン、日本の計6カ国の指導者が、各国の“女子選手のその後”について報告しました。世界柔道選手権の関連行事としての位置付けでしたが、柔道界初の国際女性シンポジウムとして、注目を集めました。

「シンポジウムの運営など生まれて初めて」という事務局長の永田千恵さんや山口香さんなどが準備に奔走し、柔道関係者を含め200人が参加する充実したものでした。

小笠原悦子さんが理事長をしているNPO法人ジュース（JWS＝スポーツに関わる女性を支援する会）は、2006年の第4回世界女性スポー

ツ会議（熊本）に向け活動中です。今年1月24日、東京で「女性スポーツサミット2004」を開催しました。私は「全体会」のパネリストとして出席したのですが、これも200人以上の参加者を集め、大盛況でした。

「女性スポーツの振興について考える」という地味な内容にも拘らず、大勢の女性たちが休日に詰め掛けたことに、驚かされました。女性たちの意識は、私が考えている以上に大きく変化しているようです。

学術の分野では、飯田貴子さんを中心に「日本スポーツとジェンダー研究会」が設立され、この7月3日には第3回大会が予定されています。女性問題に詳しい心理学者、小倉千加子さんを演者に迎えての講演会や、「いつまで続くスポーツ界のジェンダーブラインド」のテーマでのシンポジウムなどが行われます。

この3つの団体は、いずれもここ5年ほどの間に設立されました。共通しているのは、女性とスポーツの問題を解決するために、女性が中心になって組織を作り、社会にメッセージを発信する姿勢を持っていることです。

解決のために行動する

こうした活動について、私は旧西ドイツのスポーツ政策の呼び名にヒントを得て、「第3の道」と名付けたいと思います。

「第1の道」はエリートスポーツ、「第2の道」は大衆スポーツ。その2つの道を歩む人たちを支える活動をするのが「第3の道」です。女性たちが、自らスポーツを楽しむだけでなく、女性スポーツの発展を阻害する問題に気付き、それを解決するために行動する。

これは、まさにWSFジャパンが目指してきた道でもあります。これまで蒔いてきた種は根を張り、勢いよく芽吹いています。

「NFLの経験を新潟のスポーツ振興に」

ときこ チアリーダーの石田季子さん



東京・渋谷にて

Jリーグ（日本プロサッカーリーグ）2003年、J2で見事、優勝を果たし、J1への昇格を決めたアルビレックス新潟。選手の頑張りはもちろんですが、多くのサポーターやスタッフの支えも大きかったに違いありません。会場を盛り上げる「アルビレックスチアリーダーズ」もそんな陰の力の一つでしょう。そのメンバーの中に本場アメリカのNFL（プロのアメリカンフットボールリーグ）のチアリーダーとして活躍した石田季子さんがいます。石田さんにチアリーダーの魅力、日米の違いなどを伺いました。

（11月27日＝聞き手：高橋昭子）

ミニスカートがはきたかった

— まず、チアリーダーを始めたいきっかけをお聞かせください。

石田 小学生の頃からバトントワリング、中学生の時は新体操、高校では器械体操をやっていました。高校3年の夏休み、受験勉強の合間にテレビを見ていたら、チアリーダーの大会をやっていました。そのコスチュームがとても可愛くて、私もミニスカートをはいてチアをしたいなあと思いました。そこでチアのクラブのある桜美林短期大学を受験しました。

— 小さい頃から、身体を動かすことが好きだったのですか。

石田 短大卒業後もチアリーダーを続けたくてオンワードに就職しました。

— そして本場アメリカのNFLのチアリーダーへ挑戦されるわけですが何がきっかけだったのでしょうか。

石田 少しでもチアの本場、アメリカのものに近づきたいと、数少ない資料からいろいろな情報を

探してコスチュームのデザインを真似てみたりしました。アメリカに対するあこがれがとても強かった。でも、自分とはかけ離れた世界だと思っていました。

そんな時、NFLのダラス・カウボーイズで日本人女性が頑張っているという話を聞いて、ショックを受けてしまいました。日本人には出来ないものだと思っていましたから。それなら、もしかしたら、私にも1%は可能性があるのではないか。そう思ったらあとはあたって砕けるの心境でした。

— 現在は日本でもNFLチアリーダーのオーディション情報がいろいろと入ってきますが、石田さんが挑戦された頃（2001年）はまだ十分な情報がなかったのでは。

石田 チーム側もアメリカ以外の国から挑戦する状況を考えていませんでした。NFLのチアリーダーというのはその地域に住んでいるとか、学校に通っている人でなければ受け入れません。海外から受かるのはまず不可能に近い。

私がNFLに挑戦しようとしていた時は、会社をやめてUSA (United Spirit Association) というチアの団体の日本支部に所属していました。その団体の関連会社が、私が挑戦したサンフランシスコ49ersとサンディエゴチャージャーズのチアリーダーのプロデュースをしていたので、受験することができました。

— そこから石田さんのチャレンジが始まったのですね。

石田 今思えば自分でもびっくりしています。それまでチャレンジすることはそんなに得意ではありませんでした。自分でもよくやったと思います。

— 本場のチアに挑戦しようという時、ご両親や友達などまわりの反応はいかがでしたか。

石田 私はアトピー症の持病があり、一時は命に関わるほどひどい状態でした。かろうじて生き延びた感じです。ですから両親は自分の好きなことをしなさいと反対も賛成もせず、でした。友人は挑戦しておいでよと後押ししてくれましたが、会社からは、安定している生活をこわしてまでアメリカへ行く意味があるのか、と言われました。本場のチアリーダーといえども、それで食べていけるわけではありませんから。趣味の範囲でいいのではないかと。でも、私はそれでも本場へ行ってみたかったのです。

チアリーダーは誇り

— 日本とアメリカのプロスポーツをご覧になっているわけですが、その違いは。

石田 アメリカへ行っての第一印象は、スポーツが生活に密着しているなということです。例えば、普段、子供たちが遊んでいる中でもフットボールの要素がたくさん含まれています。

どんなスポーツでも観客として子供が主体になっています。例えば試合会場のフェンスが日本と比べると低くなっていて、手を伸ばせば選手に届くくらいです。臨場感があって、選手をより身近に感じられる。選手に対する憧れが強くなりますよね。エンターテイメントとして“見せるス

ポーツ”がアメリカはうまいなと思いました。日本ももっと見せる工夫が必要ですね。

— チアリーディングについてはいかがですか。
石田 アメリカでのチアリーダーはやりたい人が誰でもできるという訳ではなく、学校のチアなら一定の成績を保っている人でなければなりません。私がいたチームにも博士号を持っていたり、大学を一番で卒業したりという人がいました。人のお手本になる集団なんです。ダンスがうまいとか、可愛いとかだけではなく、普段の生活がお手本となる人がチアリーダーになれる一つの条件ですね。

— 日本の場合はどうでしょう。

石田 まだ、仲良しグループの団体というところもあって内輪受けで満足してしまう。これではチアリーディングを広めることができません。この点は日本でも変えていけたらと思います。

— 外見だけでなく中身も大切ということですね。

石田 運良く、本場のチアを経験させていただいたけれど、私はまだ中身が伴ってなくて、これはもう一回、勉強しなくてはと実感して日本に帰ってきました。

— チアリーダーの待遇についてお聞きします。

石田 NFLのどのチームでも大体同じだと思いますが、チアをやって出る報酬は1試合で平均、5千円から6千円ですから、それだけでは生活できません。

— それなのに、なぜ、皆チアリーダーになりたいのでしょうか。

石田 チアリーダーが自分の身近にいるということは大変な誇りです。私がアメリカで銀行口座を開けようとした時、保証人がいないのでなかなかOKが出ませんでした。でも、実はサンフランシスコ49ersのチアリーダーであることを話したら“じゃあ、それが保証だよ”と言って開設許可が出ました。アパートを借りる時も同様でした。

— それだけ社会がチアリーダーの存在・地位を認めているということなのですね。

石田 なりたくてもなかなかないわけですか



アルビレックスから世界に向けて情報発信を！
(C) Albirex Cheerleaders

ら、お金には変えられません。

— 現在の所属チーム、アルビレックスではどのような待遇ですか。

石田 アメリカと同様のスタンスです。チアだけで十分な収入を得ることはできませんから、皆、仕事をしながらチアをやっています。私も専門学校で事務の仕事しながら、夜や週末にチアの練習をしています。試合のとき以外でも、2週間に1回は新潟へ行きます。

— 石田さんから見たアルビレックスの魅力は何でしょう。

石田 新潟に行って驚いたのは、町じゅうでアルビレックスを応援していることでした。選手がサポーターに近い存在になっています。選手はちょっとしたイベントに出演したり、子供たちのサッカー教室に積極的に協力したりしています。地域をとっても大切にしているチームだと思います。アルビレックスの良さを新潟だけでなく、全国、そして世界に広めていきたいと思っています。

— 試合以外のチアリーダーの具体的な活動はどのようなことでしょうか。

石田 募金集めのためパフォーマンスを披露したり、ボランティアで福祉施設へ慰問をしたり。地域に貢献するのがチアリーダーの役割です。

アルビレックスに託児所を

— ご結婚していらっしゃるようですが、家庭との両立はどのようにされていますか。

石田 家族の支えがあるからチアリーディング

ができます。だからこそ、家庭に迷惑をかけたくありません。私は料理をするのが大好きなので、日ごろはおいしい料理をたくさん作って、家を空けることが多い分を補っています。主人も趣味でアイスホッケーをするので、私のチアに対しても理解してくれます。

日本にいる時は、チアは若い子しかできないと思っていましたが、アメリカへ行ったら子持ちの人もいるし、38歳でルーキーなんて人もいました。女性は出産・子育てということに直面しますが、彼女たちは同年齢の人たちへ、もっとできるよと教えてあげられる存在ですよ。自分も彼女たちのように頑張らなくてはと強く思います。

— 今後の抱負や夢をお聞かせください。

石田 日本人のチアリーディングは技術もあがっていて、今は海外とそれほど大差がありません。エンターテイメントとしての見せ方をもっと研究して、アルビレックスチアリーダーズからいろいろと情報発信したいと思います。将来は本場アメリカからも日本にオーディションに来るようになったら面白いですね。

チアとは直接関係ありませんが、夢は託児所付きの施設を作り、女性にやさしい環境づくりのお手伝いをする事です。アメリカにはスーパーにも託児所があって、子どもを預けてゆつくり買い物ができます。女性が自分の時間を持ちやすい。アルビレックスチアリーダーズでも託児所が持てたらいいですね。

— 再度、アメリカで挑戦したいと思いませんか。

石田 子どもができて小学生くらいになり、自分が40歳くらいになった時、アメリカでまたオーディションに受かったらすごいよね、なんて主人とも話しているんです。

<石田季子さん略歴> 桜美林短期大学入学後チアリーディングを始める。2001年にNFLのサンフランシスコ49ersチアリーダーズ「ゴールド・ラッシュ」のオーディションに合格し渡米。現在はサッカーとバスケットボールのチームを持つアルビレックスの専属チアリーダー「アルビレックスチアリーダーズ」に所属。75年、神奈川県生まれ。

日本女子柔道の変遷

競技スポーツの観点からの一見解

東海大学体育学部教授 橋本敏明

時の流れと女性の躍進

今年8月にギリシャで第28回オリンピック競技大会(2004/アテネ)が開催される。これから次第に世間の関心が高まるだろう。柔道も日本代表に誰が選ばれるのか、興味津々である。

4年前のシドニー大会では、日本が獲得した18個(金5、銀8、銅5)のメダルのうち、柔道が8個(金4、銀2、銅2)と44%を占め、金メダルに関しては5個のうち、実に4個が柔道によるものだった。

この18個、よくよく見れば、何と女性が13個も獲得している(金2、銀5、銅5で占有率72%)。柔道でも男女半々の割合である。「女性の躍進」と言ってよいだろう。女人禁制から始まる近代オリンピック競技の歴史を顧みれば、隔世の感がする。

ところで、日本の女子柔道が競技化に踏み切ったのは約25年前のことである。このことは、講道館柔道110年の歴史から見れば新しい出来事であり、従来の「試合をしない」という方針の大転換であった。競技化が進む国際的動向を無視できなかったことが大きな要因であったといわれる。

競技化に至る主な事項を挙げてみる。

- 1968 講道館女子部で試合について検討を始める。
- 1974 国際柔道連盟(IJF)が世界女子選手権大会を主催することを申し合わせる。
- 1974 講道館女子部で試験的な試合を行う。オセアニア女子選手権大会開催。
- 1975 ヨーロッパ女子選手権大会開催。
- 1976 IJFが女子柔道試合審判規定を決定。
- 1977 パンアメリカン女子選手権大会開催。全柔連が女子の試合実施を決定。
- 1978 全日本女子柔道選手権大会開催。
- 1979 全日本女子選手強化合宿開始。
- 1980 第1回世界女子柔道選手権大会が米国・ニューヨークで開催される。日本は8階級中7階級に参加する。

この推移から、世界選手権大会の開催に向けて布石が打たれていく状況と、後追いで対応しながら競技化を図る日本の姿を窺い知ることができる。

米国の女性柔道家の情熱

1980年初冬に、米国のニューヨークで世界女子柔道選手権大会が開催されたことは、とりもなおさず女子柔道のオリンピック参加への扉を開くことでもあった。競技スポーツ関係者にとって、オリンピックスポーツとして認められることの意味は大きい。それは誇りであり、発展の基盤となる。

世界選手権大会開催を強力に推し進めたのはIJF会長の松前重義だった。前年の12月、パリ総会で会長に選任された松前は、女子柔道の置かれた状況を的確に把握し、女性柔道家たちの意見に耳を傾けるとともに財政面の課題を解決して大会を実現させた。さらに、その後もオリンピック参加に向けて国際オリンピック委員会(IOC)と粘り強く交渉し、在任中に実施の承認を取り付けた(1985年5月のIOC理事会・総会、1992年のバルセロナ大会から正式種目)。初の世界選手権大会を主管した米国の女性柔道家、ラスティ・カノギさんは当時を次のように振り返っている。

初めての
世界女子柔道選手権大会開會式
女子柔道オリンピック参加への扉となった



「彼(※松前重義)が二期続けてIJF会長であったことは男女の柔道にとって有益でありましたが、とりわけ女子の柔道には本当に幸いでした。第一回女子世界柔道選手権大会は途方もない試みでした。アメリカ柔道連盟の支援もとりつけられず、私は全く孤独で、海図のない海に船出したのでした」(松前文庫No.71, 1992)

参加は27カ国、149名で、観客も少なかった。しかし、そこには新たな歴史の一步を踏み出す熱気があった。柔道がマイナースポーツである米国で、仲間の強力と支援を頼りに大会運営を行うカノギさんと仲間たちのバイタリティには度肝を抜かれた。まさしく女性が計画し、運営し、競い合った大会であった。

日本女子柔道の躍進と将来

第1回大会では山口香選手(52kg級)の銀メダル1個に終わった日本だが、回を重ねるごとに競技力を向上させ、第3回ウィーン大会で山口選手が待望の金メダルを獲得した。さらに、第5回エッセン大会では金メダルこそ逃したが5階級でメダルを取った。以後、昨年の第13回大阪大会までの間、第9回千葉大会を除き、8階級のうち半分以上の階級でメダルを獲得している。「柔ちゃん」の愛称で呼ばれる田村亮子選手などの人気選手も現れ、一つのブームを作り出している。

試合経験で後れをとった日本が数回の世界選手権大会を経て実力トップレベルに成長した背景には、選手たちはもちろんのこと、指導者、支援者を始めとする多くの人々の献身的な努力があった。トップ競技者は突然生まれるものではない。地域や学校の柔道場で基礎を教えた指導者が必ずいる。我々は、女性の試合が冷ややかに、あるいは興味本位に見られる傾向が強かった時期に指導と普及に当たった指導者の努力を忘れてはならない。

日本の女子柔道は、これからが正念場だろう。女性自身が、競技面のみならず全般的な課題に対して男性とともに主体的に取り組んでいかなければならない。その先駆的役割を競技者として活躍した女性たちに期待したい。紙幅の都合で、抽象的な言い回ししかできないが、国内外に活動の場はいろいろある。女子柔道で育った人材が中心となり、壁があるなら乗り越えて、女子柔道の未来を切り拓いてもらいたい。



第一回世界女子柔道選手権大会で
山口香選手が銀メダル

嘉納治五郎は、講道館柔道を創始(1882)してから約20年後の1901年頃に、自宅の道場で稽古を希望する女性たちを自ら指導したといわれている。嘉納の考え方は、言うまでもなく体育的、教育的な面を重視するものであり、無理が生じる試合は奨励しなかった。そのことが、日本の女子柔道が長年、試合を行わなかった大きな理由と指摘されるが、このことによって嘉納の方針を云々すべきではないと思う。むしろ、当時の女性をめぐる社会状況と武術の歴史を考慮するならば、女子柔道を排除せず、自ら研究し、稽古方法を考案した熱意と慧眼に感謝すべきだろう。私は、教育者としての目を、そこに強く感じる。

嘉納は、クーベルタンンの要請を受けてIOC委員となり、オリンピック運動に深く関わった。いわば競技スポーツの光と影を最もよく知る立場にあったといえる。その嘉納が確立した柔道思想は、性の違いに左右されるものではない。

柔道は、男女の両輪を得て、人間に有益な体育・スポーツとして新たな一步を踏み出した。発展の鍵は、女性の手の中にあると言ったら、言い過ぎだろうか。

<はしもと・としあき>1949年、広島県生まれ。東海大学文学部文明学科卒業。現在、東海大学体育学部武道学科教授、松前柔道塾副塾長。柔道を軸に武道研究を行うとともに社会教育活動を実践している。